

慢性腎不全患者の食事情報用紙を用いての食事指導

柏木美保、山平みか子、伊藤浩子、船木弥生

秋田組合総合病院 西3病棟

The Useful Application Of Personal Diet Sheet For Dietary Education Of Patients With Chronic Renal Failure

Miho Kashiwagi, Mikako Yamahira, Hiroko Itoh, Yayoi Funaki

Akita Kumiai General Hospital

< I. はじめに >

慢性腎不全の保存期～透析導入期の患者及びその家族に対し、退院に向けた食事指導を栄養士に依頼している。受け持ち看護師も生活指導を含め、患者の食事指導を行っていましたが、「食事についてどこまで指導すればいいかわからない」「指導が難しい」との声があった。

また、患者からも「聞きたい事をうまく聞けなかった」「もっと他の事も知りたかった」との要望があり、改善が必要であると感じられた。そこで、食事指導が円滑に受けられるよう事前に食事情報を収集し、栄養士と連携を図ることで、患者の生活により近づいた指導の方向性がみえたので、報告する。

< II. 研究方法 >

1. 研究期間

平成19年8月～10月

2. 対象

当院入院中の慢性腎不全保存期2名、透析導入期3名（男性4名、女性1名）

病棟担当栄養士3名

受け持ち看護師5名（図1）

研究方法

* 対象

- ・当院入院中の慢性腎不全患者保存期2名、透析導入期3名（男性4名、女性1名）
- ・病棟担当栄養士3名
- ・受け持ち看護師5名

* 方法

- ①食事情報用紙の作成
- ②食事情報用紙を用い、受け持ち看護師が食事指導前に患者より情報を聴取
- ③食事情報用紙を提供し、栄養士より指導実施
- ④食事指導後、患者・栄養士・受け持ち看護師にアンケートを行い、評価する

図1

3. 方法

- ①食事情報用紙を作成（図2）。
- ②食事情報用紙を用い、受け持ち看護師が食事指導前に患者より情報を聴取。
- ③食事情報用紙を提供し、栄養士より指導実施。
- ④食事指導後、患者・栄養士・受け持ち看護師にアンケートを行い評価する。

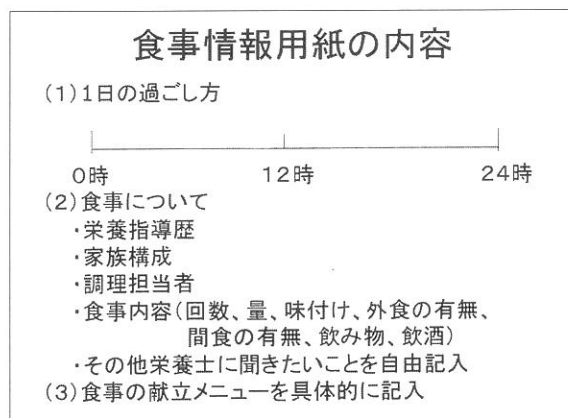


図2

<Ⅲ. 結果>

食事情報用紙は参考になったかについて、「参考になった」が患者5名、栄養士3名、「少し参考になった」が看護師5名であった。

栄養士から「事前に嗜好や家族人数、調理担当者を知る事ができた」、看護師から「日々の食事について知る事ができた」とあった（図3）。

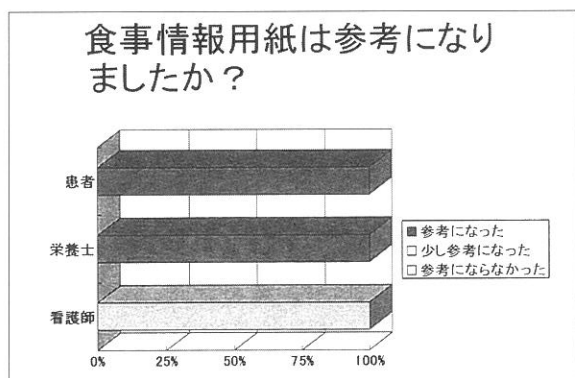


図3

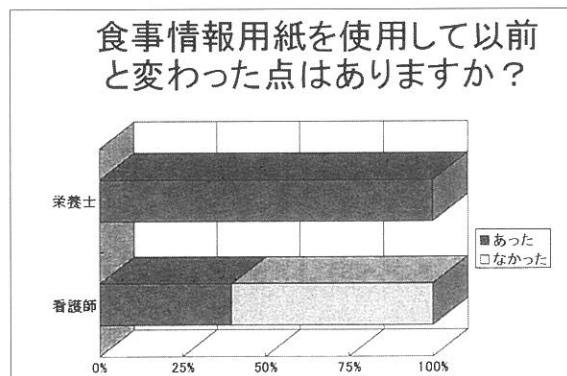


図4

食事情報用紙を使用して以前と変わった点について、「あった」と看護師2名、栄養士3名が答えており、栄養士からは「食事調査の聞き取り時間が短縮できた」「個別性を持つて的を絞って指導できた」とあった。また、「なかった」と看護師3名が答えていた。看護師からは「活用機会が少なかった」とあった（図4）。

患者への質問として、食事指導の内容について「よく分かった」2名、「分かった」2名、「少し難しかった」1名であり、「1日、1日やっていかなければならないのか」「頑張ってやってみ

る」とあった(図5)。

今回栄養指導を受けた5名のうち、以前栄養指導を受けた患者2名に以前と変わった点はあるかについて、2名中1名が「あった」と答えていた(図6)。

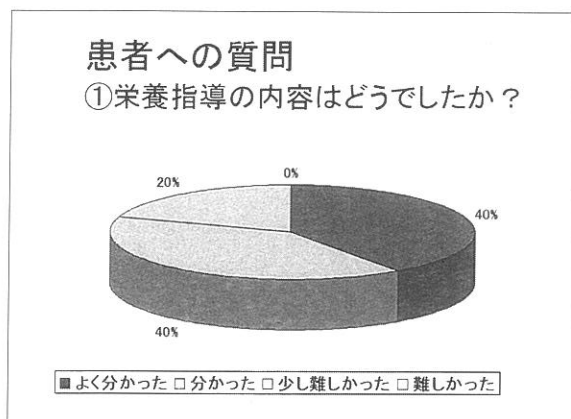


図5

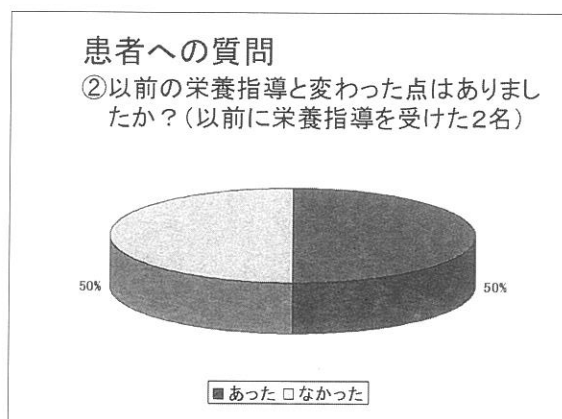


図6

<IV. 考察>

食事情報用紙は全員が「参考になった」と答えていた。今までは栄養士が食事情報を聴取してから指導を行っていた。事前にその内容を知る事で聴取時間の短縮となり、個々に合った指導を行う事ができたと思われる。指導内容については患者4名が「分かった」と答えていた。食事は患者が生活してきた中で一番身近で関わりの深い行為である。患者側に記入してもらうことで、今までの食生活を振り返り、今後の食事について考える機会となったのではないかと考えられる。また、栄養士の協力のもと食事情報用紙を作成・使用したことで、患者・栄養士・看護師で同じ情報を共有することで連携を図り、互いの信頼関係を強くし、有効な指導へと繋がったと考えられる。

しかし、看護師の半数が情報用紙を使用しても「変わらなかった」と答えていた。看護師は食事については、身近なところでの関わりが多く、また栄養士に食事指導を依頼しているので、栄養士に頼っている部分も多いと思われる。本田¹⁾は「つまり、医療者の指導に耳を傾けさせるのではなく、援助者がどのくらい詳細に患者さんの話を聴き取る力があるかが、栄養指導成功への最初のキーになると思います。」と述べている。受け持ち看護師は、栄養士からの食事指導の内容をどのようにすれば患者が実践していくことができるかを考え、信頼関係を築いて関わっていくことが大切だと考える。

今回、食事情報用紙の実施期間が短く症例も少なかったため、今後も継続して行い食事指導のさらなる発展につとめていきたい。

<V. 結果>

1. 食事情報用紙を作成し、事前に情報を提供することで、より患者の生活に近づいた食事指導となった。
2. 食事情報用紙を使用することで、患者が食事療法をより現実的なものとして捉えられるよう

になった。

3. 食事情報用紙により、患者・栄養士・看護師の間で情報が共有され、さらに連携が深まった（図7）。

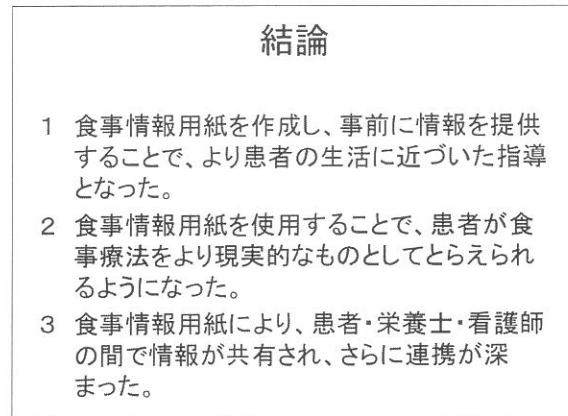


図7

引用文献

- 1) 本田佳子：食事療法のエンパワーメント患者中心の栄養指導、看護学雑誌、Vol.69、No.2、2005